

現地ルポルタージュ(その二)

漁業・漁村の発展を支える

新宇部漁協婦人部(山口県)

山口県は、三方を海で囲まれ、かねてより漁協運動が盛んである。そして、その実質的中核をなすのが婦人部であり、県下各地で多彩な活動が続けられている。

ここ新宇部漁協婦人部も、独自の加工品開発に取り組むなど、魚食普及を始めその活動が生き生きと続けられている。

まず、所属する漁協と漁業の概要から紹介していく。

一、新宇部漁協と漁業

新宇部漁協は、山口県の瀬戸内海沿岸に面し、宇部市内の宇部新川、宇部、宇部中央の三漁協が合併し、一九九七年五月に発足した。人口およそ十七万人で県下第二の規模である宇部市の中心部にある。市内には他に四漁協があるが、新宇部漁協が宇部岬漁協とならんで規模が大きい。

ここでの漁業は、三、五トンの底曳船を主力に営まれ、漁獲種類は、くるまえび、しゃこ、アナゴ、ガザミ、キス、いいだこ、はも、ひらめ等。

正組合員三二二名、うち婦人組合員が一〇六名。各漁家の婦人も正組合員として加入している。全員が専業漁家である。

当地の漁業の歴史を溯れば、いわば出稼ぎの漁場として宇部海域を利用していた、広島県沼隅郡内海町横島の漁業者が、やがて定住したのがはじまりとか。現在の漁家はその三代目にあたる。

所属漁船一六八隻。宇部沖を主要漁場に一部伊予灘に出漁、所属船の総水揚げはおよそ一五億円である。

二、婦人部の活動組織

「浜のかあちゃん」はとにかく元気がい。婦人部の役員の皆さんが一同に会すると圧巻。ことに部長の渡壁さんは四十代のばりばりで、若くして部長に押されるだけあってリーダーシップに溢れて、パワーを感じさせる。

役員は七名。部員一五四名を一九の班に分け、それぞれに班長がいて班会議を随時開催し、意見を集約する仕組み。しかし、発足まもないこともあって、今のところ、どちらかといえば役員主導型で活動が進められていることは否めない。

ところで、山口県下全体では漁協婦人部は、七地区に七七あり、総勢八四七一名の部員がいる。うち宇部地区は九婦人部あり、

新宇部の渡壁部長は地区の副部長を兼ねる。県を統一する組織として漁協婦人部連合会があり、各漁協婦人部の活動の基本方針はここで決められることになっている。

三、活動の実際

(一)加工品 瀬戸内レンチョウ「甘辛煮の開発」レンチョウという聞きなれない魚は、大きくても体長一五センチ程のもので、もともとさしたる商品価値のない魚であった。自分たちで食べる以外はほとんど捨てていたという。これを、魚食普及活動の一環として、加工して販売することを企画した。魚を開いて干し、ローラーにかけて揚げ甘辛く煮る、カルシウム豊富なおやつとして



「レイチョウ」の下ごしらえ

また酒・ビールのつまみとして最適である。

現在は試験販売の段階で、個人的に注文に応じたり、「宇部市さかなまつり」のイベントとして販売されている。評価は上々で、本格販売へ準備中である。値段は大パック（約一五〇グラム、五〇尾程）五〇〇円、小パック（約七五グラム、二五尾程）三〇〇円である。

今後は、これも通常ではさしたる利用価値のない小魚（じゃこ＝雑魚）の天ぷら、「じゃこ天」を開発したいという。

いままで見捨てられていた、こうした小魚を付加価値を付けて販売することで、魚食を普及させ、漁業の発展につなげたいと意欲的だ。

(二) ふれあい・組織強化活動

管内農協等八団体との協賛で、昨年からは「農山漁村料理講習会」を開催している。年四回実施されおよそ四〇名程度が参加する。地元宇部市始め周辺の市町村から農村・漁村の婦人が集う。

(三) 資源・環境と健康活動

県漁婦連の幹旋の粉石けん（「夢天香」）の普及活動にも熱心で、部員全員が一箱ずつ購入するというキャンペーンを行なっている。また、手づくり廃油石けんを開発し、市民祭りで無料配布し環境問題への関心を促している。さらに、当婦人部の独自の運動として、すでに二十年来続けられている



宇部市さかなまつりの石けん普及活動

ものに、リサイクル活動がある。市内にある施設「くるみ園」へ、婦人部員が収集した古着を提供し、感謝されている。

その他、料理教室、海の子作品募集、婦人部だよりの発刊、一日皆貯金の推進、魚の慰霊祭、海浜清掃などの活動が年間を通して行われている。

四、今後の課題

役員の皆さんが課題としてあげたのは、豊富な瀬戸内海の小魚加工をさらに進めるための施設、備品の充実であった。一定の

施設で持続的に加工販売することで、漁協の収益と漁民の奥さん（婦人部員）の働く場の確保につながることを指摘する。

組織的課題としては、部員をいかにして参加させ、活動を盛り上げていくかをあげた。総会の出席率もよく結束力も悪くないが、「皆が寄ってくれるイベントを開かなければなあ」「皆を惹きつけるイベントを作らなければ」と頭を悩ますのが現状であるという。

五、地域社会との関わり

筆者の感じた課題を、最後に記しておく。それは、地域の一般住民との交流、地域社会のなかでの漁業、漁民、婦人のあり方、漁協、という視点がもっとほしいということである。合併直後で仕方ない面もあるが、宇部市という市街地を控えているだけなお、地域社会全体の中での漁業を考えることが重要になる。

現在、農山漁村料理講習会、消費者向け朝市、お魚まつりイベントなどが行われているが充分ではない。漁民以外の人々にも日常の活動の枠を広げたい。漁業者だけの活動にとどめておかないことである。地域の生活者全体で協同することで始めて解決されることも多いからである。

（平井 隆）